

# 息子がアルツハイマーの母を支えて

9月10日にふれあい館で行なわれた認知症講演会。アルツハイマー型認知症の母を約10年間介護した講師の野田明宏さんに、ご自身の介護経験や心の葛藤について聴きました。

例えるなら、認知症の在宅介護者は台風圏内にいるようなもの。何の情報も知識もありません。台風が位置や勢力もわかりません。天気図を見ると今後の動きが予想できるのに、渦中にいるとさっぱりわからない。これが在宅介護者だと僕は思っています。

## 認知症の家族の在宅介護

僕の母親「和ちゃん」は、アルツハイマー型認知症でした。介護していたのは、僕が47歳から56歳までの約10年間。歩いていてつまずくことから始まり、もの忘れや失禁などさまざまな過



3年半前に亡くなった野田さんの母・和子さん(左)と明宏さん

程を踏んで症状は進みました。僕は以前、親父の介護をしていて知識があったので、次に出てくる症状が予想でき、また、和ちゃんの症状も教科書どおりに進行していきました。

## 息子が母親を介護するということ

息子が父親を介護したり、夫が妻を、妻が夫を、いろんなパターンがあると思います。僕がいろいろ取材した中で、娘が父親の性器を見るのはそんなに抵抗ないという人は結構いました。僕の場合、息子が母親の性器を見るのは精神的にかなりしんどいものがありました。とても凜とした母親でしたから、その性器を見るということがとても恐怖というか、逃げ出したい気持ちになりました。だけど、介護していると逃げ出せないんですね。おむつ交換にしても入浴介助にしても、何かにつけて絶対裸同然にしなければいけないことがあるわけです。

初めて入浴介助するとき、和ちゃんはすでに僕を息子とは思っていませんでしたが、僕にとってはきっちり



野田明宏さん (59)

—プロフィール—

岡山県出身のフリーライター。アルツハイマー型認知症を患った母を約10年間在宅で介護。その経験をもとに『アルツハイマーの母をよろしく』など、息子による母の介護や、介護の現場に関する著書を発表。また、2014年には野田さんと母・和子さんの介護生活を描いたドキュメンタリー映画『和ちゃんとオレ』が公開。現在は執筆活動などの傍ら、施設介護の現場を知るために小規模多機能型居宅介護事業所で非常勤の介護職員として働く。

【ホームページ】野田明宏ネット  
<http://www.noda-akihiro.net/>

## 心の負担と虐待

ひとつクリアしても、また次の壁がやってきます。和ちゃんは、夜のトイレがだんだん一人でできなくなりまして。そうなるとその都度僕がついて行くか、逆にある程度時間が経ったら連れて行く。でも、だんだん座ってしなくなるんですよ。和式のトイレで立つてするんですね。夜ですから僕も平常心ではなく、「おい、座ってやれや」「ションベンもちゃんとできんのか」って言葉がだんだん荒くなってきました。自分でも反省するんですが、そんな日がだんだん増えてきて、ほとんど毎回そうなっていました。

単独、あるいは核家族で認知症の人を在宅介護するのは、閉塞感があり、相談する相手もいなくて辛いです。誰も見てないから虐待に走ってしまふこともあります。僕も虐待者です。和ちゃんをたたいて肋骨を二本

## 生きて、一緒にいてほしい

和ちゃんが83歳のころ、食事でもせるようになりました。あまりにむせるので責任が持てないと、デイサービスを2カ所断られたほどです。誤嚥性肺炎になる危険性があったので、長く生きてもらうために胃ろう(※)という選択をしました。周りには早すぎるんじゃないかとも言われましたが、おかげでその後の約4年間はのどかに過ごすことができました。

ただ、胃ろうは和ちゃんの意味でしたわけではなく、ある意味僕のがままで行なったわけです。死ぬか生きるか、彼女は決められない。ずいぶん考えさせられる問題でした。でも、僕は和ちゃんに生きていてほしい、長くそばにいてほしい、一緒にいたいと思っていたんです。僕も和ちゃんを一人にしないよういつも心掛けていました。※胃に穴をあけて栄養を直接投与すること

## 和ちゃんの介護を終えて

仕事で千葉県に行ったときのことです。取材中、「お母さんが亡くなりました」と電話がかかってきました。大泣きしながら岡山の自宅に帰ってきました。9年7カ月ぐらいいですかね。母の在宅介護は終わりました。これでよかったですか。その後いろいろな考えました。

介護しているときは束縛されていたから自由がほしいと思っていたのに、和ちゃんがいなくなったら何をしたいかわからなくなりました。9年7カ月も介護してきて、もう生きがいになっていた。介護を中心に僕の生活が回っていたんだなと思いました。

## 母への思い

僕は、手元供養として母の歯と遺骨をロケットに入れて持ち歩いていきます。僕は結婚して



一緒にボウリングを楽しむ二人

いないし子どももないから一等級がない。父も母もいないんですよ。俗に言う孤独死予備軍、無縁社会なんです。死ぬときはおフクロと一緒に死にたい、そういう気持ちはあります。介護しておフクロを見る目も変

## いま、介護している人へ

家族の介護は、それまでの長い時間の上に始まります。情が入る分、「私がかこまでやってあげているのに、なんでお母さんは応えてくれないの」とか、そういう欲求が出てきます。求めてはいけないのに、できないのに、「ここまでやってあげているのになんのよ」という変な求め方をすることがあります。

介護が終わってからも、結局どこかで「よくやった」という充実感より、「どうしてあそこでできなかったのか」という後悔や反省が前面に出てくる人が多いです。本当はよくやっているのに。

人を頼ったほうがいいです。在宅介護をしている人は、自分の介護が一番だと思っている人も結構います。家族のことは家族が一番把握しているのは間違いなく、プロにはプロの知識と経験があります。プロの意見を素直に聞いて共存していこうよ、ということも僕は言いたいです。

折ったことがあります。また、在宅介護を始めて3カ月くらいのころには和ちゃんの首を絞めたことがあります。僕も和ちゃんも泣いていて、はつと気づいたら僕が和ちゃんの首を絞めているという状況でした。どうしてそうなったのか、僕自身も本当によくわかりません。きつといろんなストレスがあつたんじゃないかと想像しています。

## あんたといえるほうがいい

まだショートステイを利用してないころ、僕も仕事が忙しく、介護中に手がでたり足がでたりすることがありました。周りからは、ショートステイに2〜3日預けて和ちゃんから離れるよう言われ、老人保健施設に行きました。迷いましたが、「どう思う、よかつたらここで2泊3日くらいしてくれませんか」と和ちゃんに尋ねると、「こう返ってきました。「わたしや、たたかれてもあんたといえるほうがいいんじゃない」。このとき、僕は在宅介護のとらえ方が変わり、「この人を見なきゃいけない」という覚悟ができました。

介護をしていて悲しみや苦しみもありますが、喜びもあります。和ちゃんがふとしたことで笑ってくれる、笑顔になってくれる。尻をこいたり大あくびをしたり、この人生きてるなって実感が得られることがある。そういうときは大笑いして楽しめます。